

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 計画

学校名	佐賀市立川上小学校
-----	-----------

1 前年度 評価結果の概要	・校内研究の充実により、全教科・領域において授業改善・授業力向上につながり、全ての職員が児童や効果を実感していることは大きな成果である。課題は、課題は、より効果的なタブレットPCを活用する力を高め、「分る楽しい授業」に努め、学力向上を図ることである。 ・いじめ対応や気になる児童への対応については、実態把握に努め、共通理解を図ったり、講師を招聘した研修をしたりすることで教師の専門性を高め、子供が安心して学べる環境を整えることができた。また、SO・SSWや外部専門機関、市教委等と密に連携を取り、ケース会議や支援会議を行っていくことで、チーム学校としてのつながりが深くなった。 ・今年度から始まった縦割り活動(あおば活動)により、異学年交流をする中で自他の新たなよさに気付くことができ、自己肯定感を高めることにつながった。また、地域学習も多く取り入れ、地域教育コーディネーターを架け橋として、地域の「人・もの・こと」を学ぶことを通して、人材バンクを充実させることができ、来年度からスタートするコミュニティスクールの大切な土台づくりとなった。
------------------	--

2 学校教育目標	「 あいさつ 1 番！ 元気 1 番！ えがお 1 番！ 」 みんなが笑顔の楽しい川上 ～「自分大好き 友だち大好き 川上大好き」な児童の育成～
----------	--

3 本年度の重点目標	1 生活および学習の基礎基本の方の育成と定着 【複数担任制】 2 自尊感情の醸成 【異学年交流・地域人材活用】 3 学校運営協議会と連動した教育活動の充実 【地域連携】
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

共通評価項目										主な担当者	
重点取組						最終評価		学校関係者評価(学校運営協議会委員)			
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
●学力の向上	○児童が「わかる授業」「楽しい授業」実現のための授業力向上 【自分大好き】 <重点目標1・2>	○授業が「わかる」「楽しい」と答えた児童80%以上 ○具体的取組を実践できている教員80%以上	・複数担任制を活かした教材研究と校内研究による授業力向上 ・単元を意識した授業づくり(単元及び毎時の導入の工夫とゴールの共有)	B	・授業が「よくわかる」「たのしい」と回答した児童は85%。今後も、複数担任制を活かし、教材研究等を充実させ、「わかる楽しさ」を実感できる授業づくりに取り組んでいく。 ・どの教科においても、児童が見通しや目的意識をもって学びに取り組むことができるような授業づくりを実践していく。	B	・複数担任制による交換授業やICTを効果的に活用した授業の実施、また、多様な教科による校内研究の充実が、教員の授業力向上につながっているものの、教員間において指導力の差や意識の違いが見られる。 ・教育センター講座や校内研究での学びを、クラスの実態に合わせてアレンジしたり、教材研究に活かしたりするなど、「わかる授業」「楽しい授業」のために具体的な取り組みができていると回答した教職員は100%であり、その中でも、特によく実践できていると回答した教職員は27%であった。 ・授業が「よくわかる」と回答した児童は90%と確実に増加している。 ・定期的にタブレットPCについての研修会を実施しているため、授業においてタブレットPCを効果的に活用できるようになってきている。	A	・主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善に努めている。 ・国語や算数における基礎学力定着の課題解決に向け、算数検定や暗唱大会など、保護者や地域を巻き込んでの取組は大変素晴らしいものであった。 ・複数担任での指導のためには、同学年の意思疎通が大変重要となる。 ・教員の授業力向上のためには、日頃の授業の店受や同僚間での教材の共有などが大切であり、ミニ研修や公開授業の実施、また、全職員で全教科の研修を実施していることが素晴らしい。	かしこい子育て部 研究主任 教務主任	
	●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感謝する心など、豊かな心を身に付ける教育活動 【自分大好き・友達大好き】 <重点目標1・2>	○「異学年交流学習」に肯定的な回答をした児童85%以上 ○学校や学級に対し肯定的な回答をした児童85%以上	・あおば活動(縦割り活動)や異学年交流活動の設定の工夫 ・人権総合学習を中心に据えた人権教育やいじめ命を考える日の取組の工夫 ・「ほかほかの木、ほかほか放送」	B	・異学年交流学習に対し肯定的な回答をした児童は87%であった。一方で、異学年間でのトラブルが起こることも稀ではないことから、お互いを思いやる気持ちをもより一層育むためにも、道徳や人権教育等を中心に、エンカウンター等を実施していく。 ・学校や自分のクラスに対して肯定的にとらえている児童は89%であったが、11%の児童について、安心・安全な学級となるため、学級活動や道徳など具体的な取り組みを充実させる。	A	・縦割り活動や異学年交流について「好き」だと回答した児童が90%であった。授業や行事だけでなく、普段の生活においても、休み時間等異学年で活動する姿がよく見られることから、縦割り活動の幅を広げ、更によりよい人間関係の構築を目指す。 ・学校や学級に対して肯定的にとらえている児童は89%であり、上期からの伸びもなく、依然として安心できていないと考える児童がいる。よって、誰一人取り残さない学級経営と個に応じた支援を充実させ、全員が安心・安全な学校づくりを目指す。	A	・全職員が児童の安全・安心な学校づくりを目指して取り組んでいることが素晴らしい。 ・異学年交流が充実しているため、子どもたち同士の間がよい。 ・命を大切に「自己肯定感」で「友達の良いところ探し」「ほめほめことば」など、取り組みが充実しているところが素晴らしい。 ・年間を通しての計画的な人権教育が素晴らしい、子どもたちの人間関係構築力向上につながっている。	やさしい子育て部 人権・同和教育担当 児童生徒支援教員 教務主任 あおば活動主任
●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実 【自分大好き・友達大好き】 <重点目標2>		○いじめ防止等について組織的対応が「報告連絡」ができていると回答した教員90%以上 ○右記の手だてを工夫して実行しているという担任90%以上	・いじめの対応についての共通理解の場を年間に5回以上行う。 ・児童の実態や個々の悩みを把握できる手だての工夫(各学級毎に) ・級外担任、支援員、同年担任等と常時気になる学級の様子を情報交換する。	B	・いじめの未然防止・早期発見・早期対応についての組織的な対応ができていると回答した職員は100%であった。今後も、「報告・連絡・相談」を密にし、組織的な対応を充実させていく。 ・いじめに限らず、学校で困ったことやつらいことがあったときに、担任やその他の先生の先生に相談していると回答した児童が74%だったことから、悩みを抱え相談できていない児童がいることがわかる。そのため、何でも相談できる信頼関係づくりや雰囲気づくり、また、日常的なアンケートの実施やタブレットを使った心の健康診断等、子どものSOSを拾い上げる手立てを講じていきたい。	B	・いじめ防止等について、「報告・連絡・相談」を精密に行い組織的対応ができていると回答した教職員は100%であった。また、個々の悩みを把握するため毎月生活アンケートを実施し、困り感のある児童を拾い上げ、必要に応じてSOやSSWなどにつなげるなど、関係機関と連携した支援ができていると回答した教職員も100%であった。日頃から、些細なトラブルもいじめ」ととらえ、担任だけでなく学年・管理職と情報共有することで、早期発見・早期対応につながっている。 ・学校のいじめに対する取り組みや対応について、保護者の96%がよく対応していると回答していることから、日頃から連絡を密に行っていることで、家庭とも連携した対応につながっている。 ・悩み等を相談している児童は71%であり、児童が気軽に相談できる体制が整っていないことがわかる。担任だけでなく、どの教職員でも相談できると、また、相談することが自分にとってプラスになると等を伝え、少しでも多くの児童の不安や悩みの解決につながってきたい。	B	・些細なトラブルも「いじめ」ととらえるため、いじめゼロに近づけることは難しいと思うが、22条委員会の報告、また、校内の様子を見る限り良好な状態にあると感じている。 ・生徒指導、教育相談など様々な問題に対して、学校内での密な報告、連絡、相談により組織的に対応するだけでなく、保護者との連携も効果的に図られている。 ・児童が日常生活において、特に家庭生活での人との関わりの中で、適切な言葉で気持ちを伝えよう力や思考力、対話する大切さやゲームに時間を費やすことにより、弱く感じる。 ・日頃から児童の悩み等を把握するための取組を実施していると思うが、実際に悩みを相談している児童の割合が71%と低いため、より多くの児童が気軽に相談することができるための取組や対応を行う必要がある。	やさしい子育て部 全職員	
●健康・体づくり		●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動 【自分大好き】 <重点目標2>	●「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と回答した児童生徒85%以上 ●「夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒85%以上	・児童のノートや作品、ワークシート、日記等へのコメント記入(成長や頑張りを称賛・価値付け)。「ほめほめカード」「お誕生日会賞」 ・キャリアパスポートと連動させた毎学期の目標設定への助言と励まし。	B	・「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と回答した児童92%であったが、8%の児童への具体的な取組を充実させる。 ・将来の夢や目標を持ち、「なりたい自分」に向かって自分の課題と目標を設定することができた回答した児童は89%であった。今後は、さらにキャリアパスポートを活用し、全ての児童が将来についての夢や目標を持てるようにしていく。	A	・「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と回答した児童が94%と増加しているものの、6%の児童の自己肯定感を高めるためにも、個別対応を充実させていく。 ・「夢や目標を持っている」と回答した児童が88%であり、前期よりもわずかに減少している。	A	・「ほかほかの木」や「ほかほか放送」の取組は、児童の自己肯定感を高めることにつながっていると思う。「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と回答した児童の割合が94%と高く、先生方の子どもたち一人ひとりの愛情を感じる。 ・小さな言葉の言葉がとても大事で、子どもたちのよいところ探しとともに、子どもをほめて認めていることが素晴らしい。	各担任・教員 教務主任 全職員 かしこい子育て部
		○地域連携活動の充実による児童の自己肯定感とふるさと愛の向上 【川上大好き・自分大好き】 <重点目標1・2・3>	○地域の方とのふれあいや学習に肯定的な回答をした児童90%以上	・地域人材活用した教育活動の充実と、活動のみに終わらないゴールの達成(川上の良さ・他者との心の交流) ・地域の方に認められる学習の場の設定 ・クラブ活動の地域展開・地域連携	A	・「地域と関わる行事を予定通りにできており、地域の方とふれあう教育活動について肯定的な回答をした児童は90%であった。今後も、学校によりホームページ等において、保護者への周知をより一層進めていく。 ・「川上のよさ」に気づくことができた回答した児童は91%であった。また、地域の方との関わりをうれしく感じている児童は94%であることから、今後も地域との学習を効果的に取り入れ、地域との連携を強化していく。	A	・学校行事や各学年の行事、また日常生活等様々な場面で地域の方々との関わることで、地域の方に認められる機会が多くなり、地域の方と一緒に学んだりできることを肯定的にとらえている児童が95%であった。 ・教科を通し、川上のよさに気づくことができた児童が96%であったことから、地域を教材としてうまく活用することができるよう、年間計画に位置付け取り組みようにしていく。 ・クラブ活動の地域展開・地域連携により、クラブ活動が以前よりも活性化された。	A	・学校において、地域と関わる活動を取り入れることは、子どもや地域住民双方にとってメリットがあるのでは、今後も積極的に実施してほしい。 ・「川上のよさ」に気づくことができた」と回答した児童の割合が96%と高い。子どもたちはそれぞれの学年での地域学習を通して地域を誇りに思う気持ちを高めていることから、学校の取組が素晴らしいと感じる。	各担任 教務主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●「望ましい生活習慣の形成」 ○あいさつ・返事の定着 ○前向き発声 ○徒歩通学 <重点目標1・3>	○「あいさつを誰にでも自分からしている」「名前を呼ばれた時、話がかかった時に返事ができる」児童80%以上 ○名札を着用している児童100%(特別な事情のある子を除いて) ○自分の足で歩いて登校している児童95%以上	・教師の率先垂範と全職員による徹底指導 ・「あいさつ名人カード」の活用及び教師による「あいさつ運動」 ・集会時の挨拶・返事、名前札の徹底指導 ・保護者の意識改革とPTAへの周知	B	・挨拶や返事がよくできている児童が増え、「いつでもどこでも誰にでも」自分から進んで挨拶ができていると回答した児童は80%、また返事ができている児童は92%であった。だが、個人差や場面や場所によっての差が大きいことから、教師が率先垂範により、より一層指導の充実を図っていく。 ・自分の足で歩いて登校できている児童は87%であり、以前よりは歩いてくる児童が増えてきているものの、依然として迷途を続けている家庭もあることから、今後も「歩育」について保護者に周知を図っていく。	A	・「あいさつ名人カード」の活用や教師によるあいさつ運動、また、放送によるあいさつ名人の紹介等の取組により、自分から進んで挨拶ができていると回答した児童は90%であった。自己評価であるため、評価については個人差があると考えられることから、今後も、教師が常に率先垂範を心掛け、児童が挨拶をしたがるような学校にしていく。 ・年度当初の保護者へのお願いも功を奏し、自分の足で歩いて登校できている児童は89%であり、特別な事情を除いては、ほとんどの児童が歩いて登校することができていた。今後も、「歩育」を保護者に周知していく。	A	・「あいさつ1番」はとてもよいと思う。子どもの元気を引き出す源であり、「元気一番」「笑顔一番」にもつながる。 ・登下校時の挨拶は、ほぼ100%の児童ができている。今では、止まってくれた自動車の運転手さんにも感謝の言葉を伝えるようになっている。 ・朝、道ですれ違う大きな声で挨拶してくれるので、とてもよい気持ちになる。 ・職場でも「挨拶がよくできて元気が良い」と話題になる。 ・車による送迎の児童が減ったと思う。	生徒指導担当 教務主任 交通安全主任 各担任	
	●運動意欲と体力の向上 <重点目標1・2>	○全クラススポーツチャレンジ1種目以上参加	・「さがんキッズ体力アップカード」の活用 ・全クラススポーツチャレンジ参加 ・あおば遊びの充実及びあおば班でスポーツチャレンジ(長縄チャレンジ)	B	・「さがんキッズ体力アップカード」を活用した。 ・スポーツチャレンジについては、今後取り組む予定である。	A	・たくましい子育て部や体育主任からの呼びかけもあり、全ての学級でスポーツチャレンジに取り組むことができた。そして、1年生がドッジボールラリーで県で2位に、6年生が3位入賞した。 ・次年度も積極的に実施することができるよう、年間計画に位置付け取り組みようにしていく。	A	・運動場いっぱい、男女一緒に笑顔いっぱい遊んで競い合いながら遊ぶ児童の姿はたくましい。 ・川上の子どもは運動能力が高いと思う。 ・スポーツチャレンジでは、複数の学級で入賞するなど、体力づくりの取組が素晴らしい。	たくましい子育て部 各担任	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減 <重点目標1・2・3>	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する	・週時給や教育課程の見直しによる業務時間の短縮 ・毎回の会議における意味づけの明確化と会議における熟議 ・地域の協働した活動の充実と報告	B	・年度当初は業務時間を超過する職員も多かったものの、教育課程や校時を工夫したことで放課後の時間が確保できるようになり、業務時間の確保につながった。 ・長期休業中には、研修期間をまとめた、休暇を取得しやすくなったことで、ほとんどの職員が年休5日取得することができた。	B	・定期的に、業務時間を超過する職員も多かったが、週1回の定時退勤日の設定や、学期初めの4～5時間授業の実施等、教育課程の工夫により放課後の時間確保ができ、時間外勤務の時間の短縮につながった。 ・全ての職員が長期休業中に、まとまった休暇を取得することができた。 ・授業の準備が様々な場面で、日頃から時間を超過してしまいう職員の職員も多いため、	A	・朝の出動時刻の上限設定や定時退勤日の設定により時間を拘束することは、職員の効率的な業務遂行の意識を高めることに大変有効であると思う。 ・退勤時刻と子どもの登校時刻が正規には8:15と間引になっていることに驚いた。こうした疑問に感じることについても教育委員会等との調整が必要ではないかと思う。 ・授業の準備等、様々な工夫の準備や保護者対応等、様々な業務に時間を費やしていると思う。	教務・教頭	
	○働きやすい職場環境づくり <重点目標1・2・3>	○「本校職員室は雰囲気良く働きやすい」「管理職や同僚に悩みが相談しやすい」と答えた職員90%以上	・地域人材活用やICT利活用、複数担任などによる業務改善 ・職力の実施、若手メンターの設置。 ・風通しの良い職員室・校長室	B	・「安心できる居心地のよい職場である」、「仕事上の悩み等を同僚や管理職に気軽に相談できる」と回答した職員が95%いたことから、職員にとって働きやすい環境づくりができていると考える。	A	・「安心できる居心地のよい職場」と回答した教職員が96%いた半面、悩みを相談しやすい環境である。業務改善がなされていると回答した教職員が91%であったことから、全ての教職員にとって働きやすい環境づくりは必要であり、悩みを抱える職員が気軽に相談できるよう、相談窓口の周知や相談しやすい職場環境を整えていく。	A	・96%の職員が「安心できる居心地のよい職場」と回答しているのは、川上小の職員が同じ方向を向いて、日々教育活動を行っている結果である。	教頭・校長	
●特別支援教育の充実	○教職員の専門性の向上及び外部専門家・専門機関との連携 <重点目標1・2>	○「特別支援の専門性が向上した」「特別支援学級児童や気になる児童に喜んで関わろうとしている」という教職員90%以上 ○外部専門家・専門機関との連携10回以上	・全教職員による特別支援教育に関わる全員研修実施や全職員による気になる児童の共通理解。 ・外部専門機関との積極的連携	A	・「この5か月で特別支援教育についての専門性が向上した」と回答した職員が91%であったことから、職員を対象とした研修等が質向上につながっていると思う。今後も、計画的に研修を盛り込み、さらに専門性を高めていくようにする。 ・子ども家庭課や市教育委員会等、外部との連携も10回以上あることから、積極的に連携を図りながら対応ができている。今後は、定期的な情報共有等も含め、連携を充実させていく。	A	・「前期同様に、特別支援教育についての専門性が向上した」と回答した教職員が91%であった。定期的な研修の実施、また、毎月の連絡会における気になる子についての情報共有等が、個別支援のポイントにもつながっている。 ・子どもの状況に合わせて、必要な外部機関と連携を図りながら支援を継続してきた。こども家庭課との連携により、親子支援の充実につながった果もあったことから、今後も、情報共有を図りつつ、連携を充実させていく。	A	・特別支援学級では、一人ひとりの特性に合わせてきめ細かい指導がされており、職員の専門性の向上を感じた。 ・支援学級の児童がいきいきと活動している様子を参観して安心した。 ・気になる児童に対しての共通理解が定期的に行われているところが多い。	特別支援Co. 全職員	

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目										主な担当者
重点取組				中間評価		最終評価		学校関係者評価		
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○学校運営協議会の確立	○学校運営協議会の設置・運用 【川上大好き】 <重点目標3>	○「学校運営協議会の場」及び「コミュニティスクール化」は有意義であったと答えた参加者80%以上	・1年間の会議の計画的な取組 ・毎回の会議における意味づけの明確化と会議における熟議 ・地域の協働した活動の充実と報告	A	・コミュニティスクールの意義を理解していると回答した職員が95%いることから、コミュニティスクールが学校にとって有意義なものとしてとらえられていると考える。また、学校運営協議会において、協議員と職員との交流を図ったことが、とても有効であった。	A	・全ての教職員がコミュニティスクールの意義を有意義なものとしてとらえているため、どの学年においても、行事や学習において、積極的に地域の方との関りをもつことができ、活動自体も充実したものとなっていた。	A	・クラブ活動のゲストティーチャーや暗唱大会、また、1年生の昔遊び体験など各学年の学習における地域人材等の活用が活発になったことは、学校運営協議会設置の賜であると思う。 ・校長の質の高い教育力やリーダーシップは、保護者・地域住民の学校運営参画を促進している。 ・多くの方が学校の教育活動に関わってもらっているため、学校運営協議会として、こうした関わりのある方々と懇談会等を通じて認識を高める必要がある。 ・今後も開かれた学校として、地域の声を聞き、学校経営に活かしてほしい。	校長・教頭
	○学校運営協議会(コミュニティスクール)の周知 【川上大好き】 <重点目標3>	○「学校運営協議会」「コミュニティスクール」について認知している保護者70%以上	・職員会議、PTA会議、「学校だより」 ・「地域Co.だより」「学級だより」等や地域諸団体等合における細やかな説明・報告、アピール・発信	B	・川上小がコミュニティスクールであることを認知している保護者は81%であった。今後も、学校だよりや様々な行事の場において、活動についての紹介等を積極的に実施していく。	A	・様々な行事や学習において、地域の方々との関わりがより一層充実したのとなり、学校だよりや各学年のお便り等でも周知を図ったことで、コミュニティスクールであることを認知している保護者が88%となった。しかしながら、依然として認知していない保護者がいることから、コミュニティスクールとして子どもたちのよりよい教育を充実させていくためにも、効率よく保護者に認知してもらう方法を検討していく必要がある。	A	・様々な活動を通して、保護者、職員とも学校運営協議会設置の認識は高まっていると思う。今後は、川上校区民全体が、学校と関わっていくような仕組みを考えてくべき。 ・保護者の学校教育活動への協力体制が整っていくよう素晴らしい。	校長・教頭・地域Co.

●・・・県共通 ○・・・学校独自 ●・・・志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・教職員の積極的な研修への参加、また全教科・領域を対象とした校内研究の充実により、全ての職員が自らの授業改善や授業力向上に努めることができている。また、体育やICT等様々な職員が自ら職員が気軽に参加できる研修を開催したことも、本校にとっても大きな成果となった。一方で、学年間のバランス等を考慮せず、ICTを活用した個別学習に頼りすぎた授業となっている学級もあることから、「個別最適な学び」の意義について、再度共通理解を図ることが必要である。次年度は、このよ
----------------	--